茨城県沿岸漁況に関する調査—I

定置漁業を中心にしたブリ永年漁況について

木　梨　　清

I 緒　言

本県の定置漁業は，沿岸遠浅で地勢的に恵まれないために，その望みなきものとみられてきたが，大正15年夏漁期に大洗地先において，上野沃氏が角網を試みたのを嚆矢として，次で昭和3年北茨城市磯原町南中郷地先漁場で平潟町を根拠として，阿部彦次郎氏と，日立市会瀬町における色川邦治氏の大謀網が相当好成績をあげたのが同漁業経営に油を注ぎ，俄かに全県下にわたつて勃興を見るに至つたのである。しかしながら漁場の沖出し距離遠く，5km に及ぶものであり，経営不利の立場におかれているにもかかわらず，現在なお，会瀬磯崎の大型定置2ケ統，小型定置3ケ　統（磯原1ケ統，平潟2ケ統）が操業している状態で漁期は4～8月の春網で茨城県沿岸を北上するブリ，アジ，サバ，マグロ等の洄游群と春～夏にかけて来游する，タイ，を主な対象としている。しかしながら近年秋に本県沿岸を南下するブリが定置漁業者の注目するところとなり，昭和 31 年から会瀬定置網漁業生産組合で秋網に着手し，4年の経過をみたのであるが好成績を収めている。

本県における，ブリ永年漁況については，三谷[1]によつて，太平洋側各県のブリの漁況の相関性と漁獲高の永年変化について解析し，茨城のブリ永年漁況は，千葉，三重，和歌山各県とともに，漸増型といわれている。そこで，日立市会瀬地先の会瀬漁場と那珂湊市磯崎の磯崎地先漁場のブリ永年漁況を知るため，会瀬，磯崎両漁業協同組合より過去の資料の提供をうけ検討してみた。この定置漁場漁獲量は，水揚げ実数値であり，この他に県漁獲量として農林統計表を利用し，本県におけるブリの永年漁況と定置漁業における，ブリはどうであるかを知るため，それぞれ考察を試みた。また三谷[1]は 1915 年からの農林統計を利用されたが，筆者は定置漁獲量が磯崎漁場は，1935年，会瀬漁場は 1946 年，からの資料であるため農林統計表の利用もその域にとどめた。

第1表　過去におけるブリの漁獲高表

	1935	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46
県合計漁獲量	125,962	603,304	287,869	425,700	1,560,739	35,895	38,227	1,158,772	653,565	103,005	27,566	723,000
定置合計漁獲量												722,707
磯崎漁場	4,282	4,185	42,112	3,911	979	19,114	352	190,091	199	18,315	2,524	368,726
会瀬漁場												353,981

	1947	48	49	50	51	52	53	54	55	56	57	58
県合計漁獲量	231,210	1,014,574	891,750	906,750	1,275,000	1.601,250	739,500	506,625	934,875	1,063,339	869,250	
定置合計漁獲量	221,535	907,961	605,325	603,153	383,599	366,930	228,907	285,709	327,945	523,788	132,368	289,239
磯崎漁場	66,600	休　漁	56,186	157,871	134,505	168,424	18,641	72,555	91,736	248,749 212,467	2,734 74,445	55,721 59,644
会瀬漁場	154,935	907,961	549,139	445,282	249,094	173,505	210,266	213,154	236,209	62,572	55,189	173,874

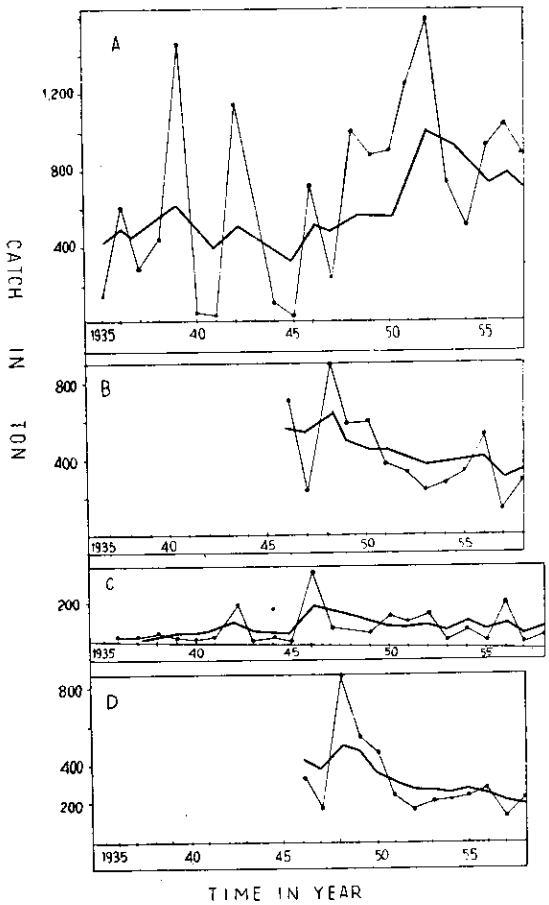
II ブリ永年漁況

ブリの漁況は他の漁業種類と比較して，非常に豊凶の変動が大きく，1947年までその値が顕著であつたのが47年以後においては 500t 以下の漁獲をみることはなくなり，比較的安定の兆しをみせている，これはとりもな

おさず，その年々の海況に左右されることは論をまつまでもないが，近年はさきにも述べたとおり会瀬漁場で南下ブリ群を目的とした秋網を設置し好結果をみている等年々漁具漁法の改善につとめていることにも起因するであろう。また近年はまき網漁業の進歩にともない，まき網船によるブリの漁獲も目立つて増加していることを勘案すれば漁獲努力によるものか，資源の増大によるものかは解明の域でないが 1953 年からのブリ永年漁況は，三谷[1]が指摘するとおり漁獲の変動はあつても，5ケ年移動平均値をみると，年々上昇の曲線をたどつている。(Fig 1 A参照)

第2表　5カ年平均値

年　別	県合計漁獲量	定置合計漁獲量	磯崎漁場	会瀬漁場
1935～39	600,714		11,093	
40～44	397,892		45,614	
45～49	577,620	614,382	123,509	419,504
50～54	1,005,825	367,659	109,399	258,260
55～59	573,492	318,330	99,735	218,600



第1図　漁獲高曲線と5カ年平均値曲線

A　茨城県におけるブリ漁獲高
B　定置網におけるブリ漁獲高
C　定置磯崎漁場ブリ漁獲高
D　定置会瀬漁場ブリ漁獲高

しかしながら定置における，ブリの漁獲は年々下降値を示し，漸減型となつている。これは後でも述べるが，若年魚（イナダ，ワラサ）の増大とカツオの様に顕著ではないが，魚道の変化にともない，まき網船や小型船による漁獲量が増大しているためと思われる。(Fig 1 B参照)

磯崎定置漁場は 1945 年以前において，漁獲がわずかのため，総体的には漸増型となつているが1946年よりの漁獲状況をみると，平行線をたどつている。(Fig 1 C参照)

会瀬漁場は 1945 年以前のデーターがなく解明することは，不可能であるが，46年以後の漁獲状況は漸減型となつている。(Fig 1 D参照)

III　最近2ケ年の漁況

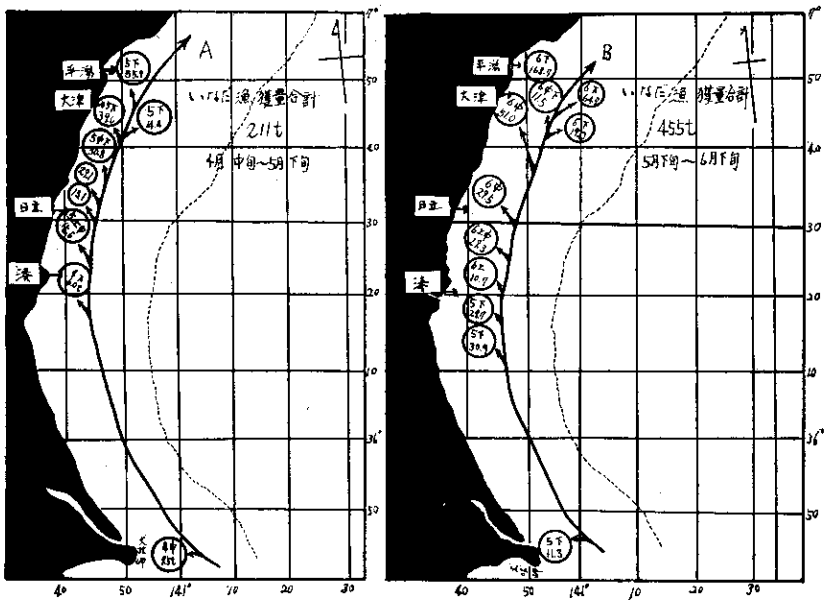
前項で説明したように，本県全体のブリの漁獲は漸増しているが，大型定置においては漸減の状態である。これは若年魚の増大とともに，魚道の変化と漁法の発達改善によつて，小型漁船により漁獲される，イナダ類が増大している現象であると思われる。今，最近のブリ，イナダ漁況についてみると 32 年の沿岸部における水温上昇状態は平年並であつたが，ブリの北上時期は平年よりやや遅れ気味であり，このことは 31 年の水温上昇が速く，5月下旬に 19.0°C に達しブリの好漁があつたことに比較して全く様相を異にしている。また 32 年は7月上旬銚子並びに波崎の中型まき網船により波崎～犬吠崎 10～13 浬の海域でトリ，メジ，が1日当り 120t 漁獲され，更に上旬末～中旬にかけて那珂湊，大洗のまき網船により，那珂湊沖合 12～13 浬の海域で，ブリ 160t の漁獲があつたにもかかわらず，定置網にはブリの漁は全くみられなかつたことから考察してこの年のブリは平年より沖合を通過したものと思われる。永年漁況からみると，32年は異常なブリ不漁年で定置漁場の漁獲物の優占魚種が，アジ，であつたことも注目される。

ブリ不漁の原因は北上する，ブリ資源量の減少か，或は沖合通過のためか，詳細なことは不明であるが，まき網の漁獲状況と終了期に定置にブリの好漁があつたことからみて，漁期中のブリ北上群が沖合通過したためと解釈することが妥当であると考える。

33年の沿岸海況は全般的に寒流系水帯の発達した年で，例年に比較して，2～4°C 低温で特に6，7月は中，下層水温が表層水温に比較して，7～8°C 差のある異状海況であつた。しかし寒流系水帯の発達した年は，豊漁年といわれている（会瀬現地談）ことを裏書きするごとく会瀬漁場は，全国第1位の水揚げをしたという。磯崎漁場も例年に比較してはかなりの増獲を示している。ブリの漁獲は32年に比較して，増獲を示しているが例年になく沿岸小型漁船により，イナダの漁が活況を呈して5月には 182t の漁獲があり，また平潟小型定置には下旬に 59t の入網をみたが，会瀬漁場は，タイ，サバ，イカ等124t，磯崎漁場は，サバ，イカのみである。

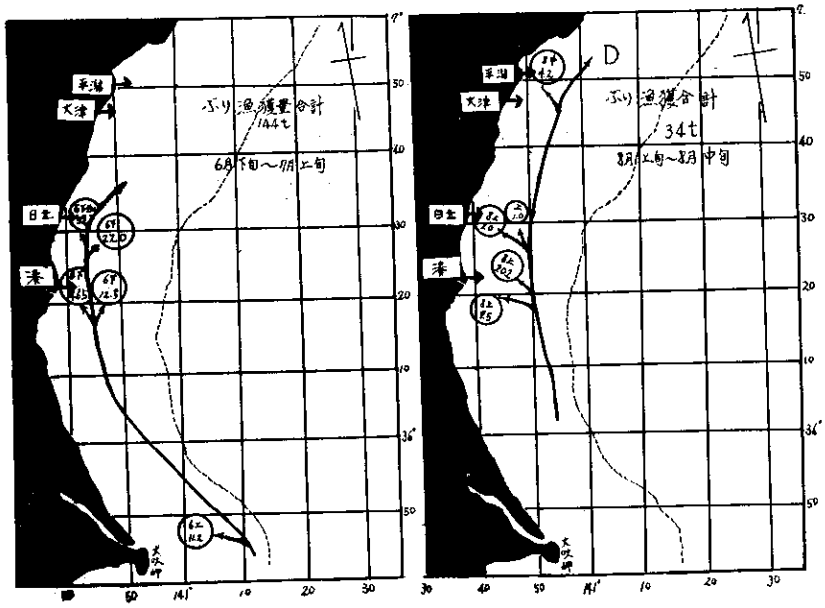
6月には，まき網船による，カタクチイワシの漁が，昨年末より異状の活況を呈していたのが急激に衰退し，イワシに変つて，那珂湊地先でワラサ，イナダの漁が 94t 漁獲され，小型船によるイナダの漁も川尻地先を中心に活況を呈し 66t の漁獲があつた。平潟の小型定置にも 65t 漁獲され，イナダの漁が目立つた。大型定置には，イナダの漁はみられず，ブリ 72t とタイ 43t の漁である。このことは 32 年と同様の径路で那珂湊地先6～10浬，川尻地先3～6浬，大津，平潟の小型定置へと北上したものと推察される。このブリ類の北上回游について，定置並びに沿岸漁獲高より考察してみると，33年度のイナダについては2周期ブリについても2周期というべき周期の現象がみられまた。1ケ月にわたつて本県南部より北上する形態と，沿岸部にわずかに，かすめ去る形態，或は群が薄く漁獲努力により消失するもの等と推察される，これらの形態を個々に検討してみると，イナダ第1周期については，4月中旬に犬吠沖 8～10 浬海域でまき網船によりイナダ 7.5t が漁獲された。その後4月下旬に，那珂湊～大洗地先海域でまき網船により 6.0t 5月上中旬久慈町地先海域で，まき網と小型船の流網により 15.6t，中下旬に川尻豊浦沿岸海域で，小型船により 73t と活況を呈し，大津地先 10 浬海域で下旬に 14.4t，大津定置，下旬に 39.0t，平潟定置下旬に 55.9t と漁獲され，イナダの第1周期の全漁獲量は 211.4t であつた。

第2周期については，5月下旬波崎地先海域で，まき網船により 11.3t，大洗～鹿島沖地先で5月下旬末にまき網船で 30.0t，那珂湊地先海域で，まき網船，小型船により 29.7t，久慈町地先海域で，小型船，まき網船により6月上中旬4.0t，川尻，豊浦沿岸部で中旬に 29.5t，大津地先海域で中下旬にまき網船小型船により95.2t，大津定置で6月中旬 51.0t，平潟定置で6月下旬 168.7t の漁獲をみ，イナダは今季最高の漁獲を示した。第2周期の全漁獲量 455.4t であつた。



第2図　ブリ類北上回游想定図

ブリの第1周期については波崎地先海域で6月上旬 11.2t 6月下旬. 那珂湊地先海域でまき網船により 12.5t，下旬に磯崎定置 46.5t，久慈町地先海域で，まき網船により 22,6t 6月下旬7月上旬に会瀬定置 51.5t でブリの第1周期の全漁獲量は 143.7t である。ブリ第2周期は那珂湊地先海域で，まき網船により，8月上旬 20.2t，磯崎定置上旬に 75t，久慈町地先海域でまき網船で上旬に 1t，会瀬定置上旬 1.0t，中旬に平潟小型定置に 4.2t で，第2周期のブリ全漁獲量は 33.9t である。



第2図　ブリ北上想定図

A　イナダ第一周期　　C　ブリ第一周期
B　イナダ第二周期　　D　ブリ第二周期

以上からみると，イナダは第2周期の5月下旬～6月下旬が最盛期を示しブリについては，本県沿岸部をわずか，かすめたものか，群が薄いため消失したものかは解明することは不可能であるが，いずれにしてもその時期の海況条件に起因することはいうまでもないことである。

IV 考　察

本県におけるブリの永年漁況をみると，ブリ漁獲量は漸増型となつている。しかしながら本県において設置している大型定置（会瀬，磯崎）2ケ統の漁獲状況はかならずしも漸増しているとはいえない。内容的には磯崎漁場は概して平行線をたどつているが，会瀬漁場は漸減となつている。これは三谷[1]の述べたように単に資源の漸増ということでなく近年は，秋網による漁獲量が含まれても，飛躍的に増加するものでもないので，近年若年魚の増加が目立つており，これを含めた資源の増加とみたい。またブリ類の漁況を本県沿岸の漁獲状況からみてみると，漁期中連続的に通り過ぎるものでなく，生態的にブリ群，イナダ群と分離されて夫々間歇的に来游するものであることが 33 年漁海況調査により考察された。

近年まき網技術の向上によりブリがその漁獲対象物となつたこと，小型船による若年魚の漁獲増加が目立つていることは今後の定置漁業にとつて，大きな課題となるのではなかろうかと思われる。

V 文　献

1）三谷文夫：(1957) 太平洋側各県のぶりの漁況の相関性と漁獲高の永年変化
日水学誌 22 (10)
2）木梨　清：(1959) 昭和 33 年度茨城県春網定置の漁況について，
ていち第 19 号（P31）